

B. 読売新聞

対象期間内の読売新聞の社説のうち、「警察」及びそれに準ずる語（「捜査当局」「県警」など）を含むものを抽出したところ、4月が5本、5月は6本、6月1本、7月3本、8月3本、9月は1本あり、合計19本となった。ここでは、その内容や論調の特徴について検討する。

(1)警察に関する見出しの特徴

見出しに「警察」の語が含まれるものは、20本の内、次の3本のみであった。

- ①どこに行った「頼むに足る警察」（4月7日）
- ②判決を糧に改めて警察再生を（5月30日）
- ③刷新会議提言・警察の取り組みが試される番だ（7月14日）

この内①は、明らかに警察に対する批判的な内容を示唆する表現だが、読者の興味を惹くための刺激的な語や極端に否定的な表現が使われているわけではない。①～③以外に、「隼君の事故死が訴えるもの」という記事でも、世田谷のひき逃げ事故への警察の対応の不適切さを批判する論調が鮮明に打ち出されているが、この記事の見出しにも否定的表現は一切含まれていない点は、注目に値する。「（桶川のストーカー事件への対応には）警察の使命感、正義感がかけらほども感じられない」「（ひき逃げの真相究明までに）長い回り道をしたのは、ひとえに初期捜査のお粗末さにあった」など、警察を厳しく批判した記事の内容と引き比べても、むしろ抑えた印象にとどまっている。

②と③については、否定的なニュアンスが感じられないばかりでなく、「再生を」とか「試される」などといった表現が含まれることにより、過去の不祥事より将来を見据えた前向きな印象を与えている。

その他の見出しを概観すると、「走る密室を襲った17歳の凶刃」「携帯電話置をフルに悪用した誘拐」のように、警察の扱った事件の新奇性、凶悪さに焦点をあてた表現や、「むごい傷いやす最善の努力を」「地域に少年育成の仕組みを」など、警察だけではなく社会全体に向けた提言調のものが比較的多く、「警察」をクローズアップして扱っているという印象を与えるものは、さほど多くない。

(2)警察に関する記事の内容と論調

警察を扱った記事のテーマは概ね次の三種類に大別しうる。

(a)一連の不祥事と警察改革

- 例) 「国民の訴えに敏感な組織めざせ」
「隼くんの事故死が訴えるもの」

(b)重大事件・現代を象徴する事件

- 例) 「『17歳の心』に何が起きたのか」
「少年たちの無法を放置するな」
「ストーカーの悲劇繰り返すな」

(c)新しい法律や社会システムづくりに向けた提案

- 例) 「火山災害の拡大防止に万全を」
「地域に少年育成の仕組みを」
「『虐待』防ぐ体制の整備を急げ」

(a)~(d)のテーマにそって、記事の内容と論調の傾向を分析する。

(a)一連の不祥事と警察改革 —— 過去への批判、楽観的将来像

分析対象記事19本のうち、警察不祥事やそれにともなう国民の警察不信、警察改革など、警察そのもののあり方やその改革について正面から取り上げた内容の記事は、5本あった。朝日新聞と同様、度重なる警察の不祥事及びそれに対する警察刷新会議の提言が行なわれた時期にしては、少ないという印象である。それぞれの記事の内容について、掘り下げて検討してみよう。

以下の三本の記事は、いずれも警察不祥事に関する批判を展開しているものだ。

①「どこに行った『頼むに足る警察』」 4月7日

〔要旨〕

埼玉県桶川市のストーカー殺人事件への県警の対応を批判している。被害者が事件の4ヵ月前から上尾署に訴えていたにもかかわらず、警察はほとんど何も対策をこじらず、結果として重大犯罪を招いた。このような不適切な対応の背景には、民事不介入を隠れみよとし、放っておけば重大犯罪を招くような事件への対応に逃げ腰な姿勢がある。「点数主義」の排除、「困りごと相談」に対応するための要員配置や組織改革など、こうした問題への積極的取り組みが求められる。

②「隼君の事故死が訴えるもの」 5月25日

〔要旨〕

不起訴処分に疑問を感じた被害者の両親の努力により、東京の小学生ひき逃げ事件の容疑者に、一転して禁固刑が言い渡された。回り道の原因は、初動捜査における警察の対応の鈍さにある。この事件は、法律、捜査司法当局など様々な分野で、被害者保護について見なおすきっかけとなった。

③「判決を糧に改めて警察再生を」 5月30日

〔要旨〕

一連の警察不祥事の「原点」となった神奈川県警の覚せい剤事件及び、幹部によるもみ消し事件に有罪判決が下った。この事件の背景から、キャリア制度や身内に甘い監察制度など、その後の事件にも共通する警察の問題点が浮き彫りにされる。

①②③は、ここで取り上げる5本の記事のなかでも特に否定的論調が明確なものである。こうした記事には警察批判に用いられる言葉や表現の傾向をはじめ、論旨の運び方にも、いくつかの共通した特徴が見られる。

①は国民の信頼を裏切った警察に対し否定的な視点から書かれた内容であり、文中にも否定的表現が並ぶ。警察批判の箇所を抜き出してみると、「最後の信頼まで裏切った警察の罪は重い」、「この間の警察の言動は、ほとんど被害者を愚弄しているといってもいいほどひどい」、「(対応にあたった警察官は被害者を) 脅し～突放している」、「警察官の使命感、正義感がかけらほども感じられない」など、きわめて強い調子の言葉が多様されている。

②のひき逃げの記事も、事故に対する初動捜査の怠慢や被害者保護のあり方など、警察の問題点を指摘する論調が中心の記事である。文中にも「(処分が混乱した原因は)ひとえに初動捜査のお粗末さにあった」、などと、否定的表現が並ぶ。③では、警察への国民感情を代弁するという形をとって、「(警察不審を招いた県警幹部の行動は)「万死に値する」、「ほとほと愛想が尽きた」などと、やはり強い調子で非難している。

またこうした強い否定表現の合間に、「困っている人、怖い目に遭っている人、弱い人がいたらを助けるという原点」(①)「被害者とともに泣くという捜査の原点」(②)を、「警察官ひとりひとりが思いおこしてほしい」などと、情緒に訴えるメッセージを折り込む論法も目につく。読み手の印象のなかで、このような否定的イメージや情緒のみが強調され、事件の背景や問題点に対する冷静な解釈を妨げるのではないかと懸念される。

①～③の記事をはじめ多くの記事で、一貫して警察批判の材料とされている問題のひとつは、警察が「何もしないこと」、したとしても「対応が鈍いこと」である。桶川の事件(①)やひき逃げの事件(②)はその典型であり、これ以外にも愛知の恐喝事件、新潟の少女監禁事件などで、事件解決のきっかけとなる訴えや情報を得ていながら、それに対して適切な手立てをうたずに、放置したことが、批判を受けている。またこのような消極的対応の背景には、③で指摘されているようなキャリア制度の問題点—すなわち減点主義とそれに起因する自己保身、事なかれ主義の傾向があるという論法も、いくつもの記事で共通に展開されている論法である。

その一方で、警察に対する配慮を示している点も共通した傾向である。たとえば①では、警察に持ち込まれる事象が複雑化、多様化している実態や、民事のもめ事との線引きの難しさなど、また②では、交通事故の増加とそれに対応する人員不足などが、斟酌すべき事情として説明されている。③では、国民の間には「警察に対する期待」や「最後はそこしかないという頼みにする気持ち」が未だにあると、警察を持ち上げている。

また①では、その実現可能性は未知数だが、市民の困りごとに対応する「すぐやる課」のような組織を作り要員には機動隊の余剰人員を充てるといったきわめて具体的解決策も提案しており、否定一辺倒の論調に陥るまいとする傾向が見られることにも、着目すべきであろう。

④ 「警察の取り組みが試される番だ」 7月14日

〔要旨〕

警察刷新会議の緊急提言から、監察制度や公安委員会のチェック機能の充実、キャリア制度、地域との関わり方、人員確保の問題など、注目すべき点を挙げている。

⑤ 警察改革—国民の訴えに敏感な組織をめざせ 8月26日

〔要旨〕

刷新会議の提言を受けた警察庁による「警察改革要綱」について、主に監察制度と公安委員会の機能の充実、地域住民との関わり、人員増強に焦点をあてて検討している。

①～③が過去の不幸事に関する内容だったのに対し、④と⑤は将来に向けた提言とその具体化案がテーマということもあり、論調も一転し、将来を展望する前向きなものとなっている。これまでの警察システムに対し、「身内に甘い監察」「形がよい化した公安委員会」などと批判しているものの、全体的にみるとそうした否定的メッセージの印象は薄い。批

判や問題点の指摘より、こうした諸問題の改革に重点を置き、肯定的な展望を中心に解説した内容となっている。また随所に国民は警察を「見守っている」「期待している」などのメッセージが盛りこまれており、前向きな印象を強めている。前述の朝日新聞と比べても、改革に対する期待感や前向きな評価が目立ち、警察に肯定的な論調となっている。

(b) 重大事件・現代を象徴する事件 — 特徴と対策

愛知のバット殴打及び殺人事件や佐賀のバスジャック事件をはじめ、短期間に少年による凶悪事件が頻発したこともあり、読売新聞では、ここ数年の少年犯罪をめぐる事情の深刻化と対策の必要性について改めて検討した記事が目立った。このテーマの記事数は、警察不祥事関連よりも多い六本に上っている。

このような文脈では、警察に対してどのような論調がとられているだろうか。

警察に対するメッセージの内容はどの記事をもみてもきわめて画一的であり、求められている点は次の三点につきる。すなわち、①少年犯罪に対する対応の鈍さを改め、犯罪の兆候を早期に感知し未然に防ぐこと、②事件の動機と背景の徹底解明、③この問題の解決に向けて、学校や病院など地域社会の他の機関と連携することである。

少年犯罪に対する論旨も同様に一貫しており、どの記事でも、この問題の背景と解決への方策を地域社会と家庭のなかに見出だそうとする姿勢が明確である。警察は地域に存在する関連機関のひとつとして、他の組織と連携を深めつつ、問題解決の一翼を担うことを期待されている。

記事全体の論調は深刻だが、警察に対して特に否定的な傾向はみられない。バスジャック事件への対応に関しては、「もう少し迅速な対応がとれなかったか」という疑問が呈されているものの、「人質の安全確保を最優先させた」事情にも理解を示している。

また少年犯罪以外にも、たとえば携帯電話を利用した誘拐事件やストーカー、虐待など、これまでにないタイプの犯罪に関する記事もあったが、これについては、警察を批判するというより、迅速な対応を求め、今後を期待する論調がほとんどだった。

(c) 新しい法律や社会システムづくりに向けた提案

少年犯罪や保育園における幼児虐待などの事件や災害の背景を分析し、このようなケースに対応するための新しいシステムづくりを提案することに主眼を置いた論調の記事も、わずかだが見られた。

いずれの記事も、このようなシステムづくりにおける「地域社会」の役割を強調している。警察は地域機関のひとつとして位置づけられ、他の関係機関と連携して問題解決にあ

たることを求められている。警察が他の機関と比べて特に重い役割や責任を担わされるということはないが、期待されている守備範囲は、災害防止、ハイテク犯罪やストーカーなど新たな犯罪、少年犯罪、家庭内の暴力まで、これまで以上に広がりを見せている。

(3)肯定的な論調

複数の記事で、警察の対応ぶりの適切さを取り上げて評価している点も目につく。たとえば岡山のバット殴打事件では、少年の個人的情報の公開に際した警察のぎりぎりの判断が身柄の保護につながったと、好意的に論じている。また「火山災害の拡大防止に万全を」（4月1日）という記事では、有珠山の噴火に際し、警察をはじめとする地域の諸機関の連携ぶりが、「災害に備えるうえで貴重なお手本」と高く評価されている。

一般にジャーナリズムは、否定的情報の価値を重視し肯定的情報はニュースになりにくいと指摘されるが、このように肯定的なニュースをわざわざ取り上げて伝える姿勢には、批判一辺倒の論調を避けようとする、送り手側のバランス感覚が反映されていると考えられる。

2. 分析結果の考察

朝日新聞の社説の内容は(1)～e. で詳しく検討したように、時間の経過による変化は少なく、警察改革に関する主張も一貫している。ただし、警察改革を正面から取り上げた4本の社説は、論調が一貫しているという以上に内容に重なりが多く、ひとつひとつの記事内容に新鮮味がなかった。警察改革が多面的に論じられてはいないという問題がある。

一般的には、注目を集めた大事件への対応の不適切さや、一連の警察不祥事を通じて国民の信頼を裏切り続けたことに対する厳しい批判が繰り返されている。特に「警察不祥事」「警察の隠ぺい体質」「警察の独善性」といった語句の多用が目立った。こうした語が常套句になることと、警察イメージの悪化には相互関係があると思われる。ただし、これが一連の警察関係での不祥事の続いた時期特有の現象なのかどうかについては、今回の調査のみではわからない。別の時期に掲載された記事との比較分析が必要となる。今後の課題としたい。

読売新聞の記事の内容や論調も、一連の警察不祥事や、少年犯罪、ストーカー、ハイテク犯罪など犯罪をめぐる環境の多様化、深刻化といった当時の状況に呼応し、どちらかといえば否定的方向に偏っている。「被害者を愚弄している」「不祥事を起こした警官は

死に値する」などといった刺激的表現や、「身内に甘い監察システム」「キャリア制度の問題」など定型化したフレーズを用いた批判が繰り返される傾向も見られる。

しかし全般的にみれば、朝日新聞より読売新聞の方が、より警察側に立った主張や論旨の運び方を展開しているという印象を受けるが、それは大半の記事が、警察に対する批判的な主張を展開する際同時に、次のような情報やメッセージを併せて伝えているためだと考えられる。すなわち、①警察側の視点からみた問題の背景や斟酌すべき事情、②不祥事があっても変わらずに、国民は警察に期待し、頼りにしているというメッセージなどである。また、警察の対応が適切だった時、効果的だった時にはそれを取り上げて評価する点、刷新会議や警察改革要綱などにもとづく改革への展望が概ね楽観的な点なども、特徴的であった。

いずれにしろ、朝日、読売両紙とも、記事の論調は必ずしも批判一辺倒というわけではなく、むしろ警察の信頼回復のための建設的批判に努めている姿勢も読み取れる。また見出しがかなり強い語調であっても、実際の内容はさほどでもないというケースも少なくない。

くわえて、このように警察への不信感が強調される一方で、あらたな犯罪（コンピューター犯罪、スポーツの場での犯罪、駅構内での暴力、託児所での虐待、ストーカー、ドメスティック・バイオレンス）に関しては、むしろ警察への期待が高まっていることが浮き彫りになった。